

ル、答

二、沼田教授休職畑助教授不日轉任ノ答ニ付工藝部ニ課スル塑造及木彫并ニ師範科ニ課スル塑造及木彫ハ水谷教授担当セラル、コト、ナル

彫刻科ではその後もさらに教育法改革の検討が続けられた。

② 白井雨山辞職

大正九年十一月二十二日、彫刻科教授白井雨山が辞職した。雨山は元治元年三月一日、伊予国東宇和郡鬼ヶ窪村に生まれ、南予中学退学後、松尾馬城に文人画を、彰義堂で西洋画を、渡辺省亭に容齋派の画を、望月玉泉に四條派を習うなどして明治二十二年、二十六歳で東京美術学校に入学し、彫刻を学び、同二十六年、第一回卒業生となった。同年、石川県工業学校彫刻科教員となり、同三十年には本校雇に、次いで同三十一年には彫刻科助教となり、大村西崖とともに塑造部設置に尽力し、同三十四年、彫刻家としては初めての国費留学生としてパリに赴いた。同三十七年帰国して直ちに本校教授に昇格し、塑造教育に尽くして多くの俊秀を送り出すとともに文展その他の審査員を歴任し、また、幾多の記念銅像原型制作に携わった。

雨山の辞職は、当時の諸新聞などの報道によれば、後進に道を開くためと、特に前年（大正八年）の帝国美術院会員選出の際、選に入らず、彫刻界に対する蟠りが高じたためと考えられるが、さらにもう一つ、文人画家の境界に耽溺したいという気持の高まりにも原

因があったようである。前述のように、雨山は若い頃文人画を習い、師とともに各地を遊歴した経験があったが、大正期には再び文人画を描き、あるいは盛んに漢詩を作るようになり、友人の大村西崖と又玄画社を作って文人画の復興を唱導するに至る。彼らの心底には当時の画家たちがこぞって技巧の末に墮し、塗抹を事としてゐるのを慨嘆し、これを警醒しようという気持があったという（『雨山先生遺作集』序文、正木直彦）。なお、大正六年以降漢詩仲間となった芹沢閑は雨山が彼に「自分は學校の彫刻科を出で、今其科の教官たること多年なるが、彫塑のことは原來氣に染まず、近來益々嫌になりたり。何卒して老後は詩と畫とを以て樂まんと思ふ」と述懐したことを伝えている（『東京美術学校校友会月報』第二十八卷第三号）。

雨山の辞任に際して彫刻科は大正九年十一月二十八日に講堂で送別式を行なった（54頁記事参照）。

③ 建畠大夢の教授就任

大正九年二月十八日、建畠大夢（本名弥一郎）が彫刻科教授（塑造実習担任）に就任した。これは大正五年の美術学校改革運動の際に論点の一つとなっていた彫刻科刷新の第一着手であった。

建畠は明治十三年二月二十九日和歌山県有田郡城山村大字境川に生まれ、同四十年三月京都市美術工芸学校を卒業、九月に本校彫刻科（選科第二年級）に入学し、同四十四年三月に卒業した。在校中第二回文展に「閑静」を出品して三等賞を受けて以来毎年受賞し、大正八年帝展開設に際して審査委員に選ばれた。

建畠は京都市美術工芸学校在校中から秀才の誉れが高かった。石